

---

# IS インフィニット・ストラトス ~大切なものを奪われた少年~

リオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～大切なものを奪われた少年～

### 【Nコード】

N3679Z

### 【作者名】

リオ

### 【あらすじ】

世界の兵器がISインフィニット・ストラトスになった時には世界の常識も変わった

IS操縦者の育成機関、IS学園に世界で二番目にISを動かした少年、おきの沖野 かすま一馬が学園へと入学する

彼はこの学園で何を感じ、何を学ぶか

今、物語の舞台の幕が上がる

## 初めに

この作品は原作ISの作者リオが考えた二次創作です

### 注意

・オリジナル主人公は束が嫌いです。束は俺の嫁派の方  
・多少話は違ったりする事が多いです。ですので原作遵守派な私は  
読まん。の方

・ISなんか大嫌いだああ!!の方

・オリジナルキャラが嫌いな方

・主人公機は若干チートです。チートは好きじゃない方

・更新が鈍速でこれ以上待てるかあ!の方

は見ない方が宜しいかと思えます

それでも見たいという方はどうぞ此方へ

では、始まり始まり

第1話 教室にて（前書き）

原作だとショートホームルームまでの間の話です

それでは、どうぞ

## 第1話 教室にて

【教室内】

「……………」

廊下側2列目の1番後ろの席に座っている男子生徒、沖野 一馬は黙って辺りを見渡す

一馬と廊下側3列目1番前に座っている男子生徒、織斑 一夏以外のこの教室にいるのは全員女子生徒のみ

一馬と一夏をチラチラと見ている視線がチラホラと女子生徒がおり、そんな中一馬は

「……………暇だな」

何時担任の先生が来るか分からず、正直暇を持て余していた

「……………そう言えば、チーフが学園に着いたら読めとか言ってたメモがあるから、それを今のうち見とくか」

一馬は制服のズボンのポケットから一枚のメモを取り出し、内容を確認すると

困ったことがあるのなら、学園の更織 楯無に尋ねとけ。力になってくれると思う

清音より

「（更織…楯無か。今は気にしなくても良いか）」

と一馬がメモの内容を確認すると1人1人の先生がやって来た

「皆さん、入学おめでとうございます。私は副担任の山田 真耶です。一年間よろしく願いますね」

と山田先生は笑顔で言っていたが、辺りはシーンとし、誰の返事も無い

「ええっと。じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。では、出席番号順で」

と山田先生の指示で出席番号順に生徒は自己紹介をし、次は一馬の  
出番となった

「次は…沖野 一馬くん」

「はい」

一馬は返事をした後に席を立ち上がるとクラスの生徒全員が一馬を見ている。一馬は余り慣れない視線に動揺せずに喋る

「どうも、沖野 一馬です。中学の時は名字で呼ばれてたんで、そっちの方で呼ばれると有り難い。とりあえず、これから1年宜しくお願いします」

最後に一礼すると大きくはない拍手が起き、当たり障りのない一馬の自己紹介が終わると次は織斑 一夏の番となる

「え……えっと、織斑 一夏です。宜しくお願いします」

一夏の自己紹介は一馬よりも短く。以上ですと言った時には、何名かの女子がずっこけた

「（まあ、根暗と思われたくなくて無理矢理終わらせたって感じだな。……ん？）」



1人の女性が出席簿らしきもので一夏の頭を叩く

痛そうに頭を押さえ一夏は振り返ると

「げえっ、関羽!？」

女性は次に角で叩いた

「誰が三国志の美髯公だ、馬鹿者」

因みに一夏の頭を叩いた女性は織斑 千冬。IS業界では知らぬ者はいない…はず

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

頭を押さえうずくまる一夏を後目に真耶と一言交わした後、千冬は教卓の前に立ち喋り始めた

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うこ

とは聞け。いいな」

千冬がそう言うと、教室は静まり返る、そしてしばらくすると

『キヤ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！』

「（うおっ！？凄い声量だな）」

千冬が現れたことでクラス中の女子は黄色い声を上げて、その中で一馬は内心で驚きながら耳を塞いでいた

まるで鼓膜が破れそうな位声量がヤバいのである

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

1人危ない奴が居たような気がしたがそれは置いとき

「はぁ……まったく毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスだけに馬鹿者を集中

させているのか？」

と、黄色い声が聞こえるなか千冬は溜め息をついたのだった

その後に一夏と千冬の関係が姉弟と分かったとき周りは

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男子で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「でも、沖野君の場合どうなるの？」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

女子達が騒ぐが千冬はスルーをする

今の世界の兵器は戦闘機や戦車ではなく、インフィニット・ストラトス（略称：IS）と呼ばれるパワードスーツ。ISは今までの兵器を遥かに超えた存在でどの世界にもあるのが当たり前。但しISは女性にしか動かせない筈のだが、例外が一馬と一夏である

理由はそれぞれ不明で動かした本人達も分かってない状況なのだ

説明は以上で、騒いでいるなか一馬は誰にも聞こえないように呟く

「今年の1年は騒がしくなりそうだな」

と表情は呆れながらも少し面白がっているようにも見える

## 第2話 代表候補生

【教室内】

「……はあ」

一馬は溜め息を吐く

その理由は教室内、廊下に多くの女子生徒が一馬を見る視線。話しかけようとするが、互いに牽制しあって中々動かない

一馬自身、女子と話すのは苦手ではない。軽い会話程度なら普通に出来るのだが、誰も動こうとはせずに一馬を見続けられているのは正直辛い

先程まで一夏も見られていたのだが、ポニーテールの女子生徒と一緒に教室から出たのである

「誰か、この状況を何とかしてくれ」

一馬は2度目の溜め息を吐く。一馬の願いが叶ったのか、この状況を打破する女子生徒が現れた

「ちょっとよろしくて?」

「……?」

左から声が聞こえ、左を向くと金髪にすこしロールをかけた女子生徒が立っていた。色白や顔つきから欧州系の人だと思う

そして一馬はこの女子生徒の名前を覚えていた。自己紹介で一夏ほどとは言えないが目立っていたので印象に残っている

「確か…イギリス代表候補生のセシリア・ウォルコットだったか?」

「オルコットですわ!あなた失礼ですよ!!」

訂正。一馬は名前は完全には覚えてないようだ

「今のは俺が悪かった。すまない。それで、セシリア・オルコット。俺に何か用なのか?」

「まあ!なんですよ、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度と言うものがあるんじゃないかしら?」

「(…:めんどくさい奴に当たったな)」

この手の相手は正直言つて苦手だと一馬は思う

因みにISは女しか使えず、そのため世界は「女々偉い」といった構造となっているために女性はその利点につけ込んで、男を奴隷のごとく利用している

男は刃向かえば最悪濡れ衣着せられ、確証が無いまま豚小屋行きな不条理な扱い

男の誰しもがこの世界は歪んでいると思つているはずだと

話は戻すが一馬はこの場をさっさとやり過ごしたかったため

「だが、もう少しで授業だ。早めに終わらせた方が良いんじゃないかと思うんだが？」

「確かに一理ありますわね」

セシリアが咳払いを一度した後しゃべった

「この私みずからって聞いてますの!？」

「ん? ああ、すまない。そう言えば次の授業の準備をしてなかったなと思ひだして、準備していたのだが…それで、何を言おうとしたんだ?」

一馬の質問にセシリアは俯き、体を震わせている。怒っているようだ。そしてセシリアが何かを言おうとした時チャイムが鳴る。

「ふんっ！」

セシリアは一馬に何も言わず。自分の席へと戻っていくのを確認すると安堵の溜め息を吐き、次の授業にのぞんだ。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

真耶が教科書を読み進めていき、生徒達はノートを取っている。一馬もそのうちの1人である。

ただ、1人だけ違う奴がいた。一夏だ。一夏から全く分からないというオーラが出ているのを一馬は感じ取っていた。

気持ちが分からない訳ではない。女子生徒はISに関する授業があるから大抵は分かる。しかし、男子は全く教えられない為に1から勉強しなきゃならない。

だが、入学前に渡された参考書を使って勉強すればいけるはずなのだが



「織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか？」

「はい」

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

真耶は教科書を読み進めていくのを止め、一夏に大丈夫かと聞いてくる。

良い先生だなと一馬は感じたと同時に動きがかわいいなと感じていた

そして一夏は少し迷っていて、何かを決意しハッキリと言った

「ほとんど全部分かりません」

その一言は周りの空気と真耶の表現を変えるほどの威力である。一馬も若干驚いている

「ぜ、全部ですか…えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

真耶の質問に誰も手を挙げない所か微動だにすらない

「お、沖野君は大丈夫ですか？ついてこれてます？」

同じ男だがこいつは大丈夫であろうと思われるのだなと一馬はそう思っている。周りの視線もそんな感じだ

まだ、一馬は真耶の質問に答えてないので大丈夫ですの表情で答えた

「俺は今のところ大丈夫ですので気にしないで下さい」

言ったら真耶は安堵、一夏は驚愕の表情を浮かべていた

「…ちなみに織斑。入学前に渡されたISの参考書は読んだか？」

千冬の質問に一夏は迷わずこう答えた

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「（捨てたあ！？いやいや、訳が分からない。どうやってら電話帳と間違えんの！？表紙で分かるだろ）」

一馬の内心でのツッコミをしているとき千冬が一夏に出席簿アタックを決めた

「痛あつ！？」

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚える」

一夏は無理だと言っていたが、千冬が凄みを見せたので了承し授業は再開された

「さてと」

授業が終わり今は休み時間。一馬は一夏にファーストコンタクトを取ろうと思い、行動した

「大丈夫か織斑？」

「大丈夫じゃない」

一夏は机に突っ伏していた。先程の授業がきているのだろう

一夏は起き上がり、一馬の方を見て何か言いたそうなので推理してみた

「名字は分かるが名前は分からない…とか？」

「そうそう。そうなんだよ。えーと」

「一馬。沖野 一馬だ。織斑」

漸く分かり一夏はホッとしていた

「そうか一馬か。なあ、一馬ってよんで良いか？俺のこと一夏ってよんで良いから」

一馬は迷ったが、此処は了承した。折角の行為を無駄にしたいくはない

「とりあえず同じ男のIS乗りとして宜しく頼む一夏」

「ああ、此方こそ宜しく」

自己紹介も済ますとあの女子生徒が現れた

「ちょっと、宜しく?」

「：お前か。セシリア・ウォルコット」

「オ・ル・コ・ツ・トですわ!」

現れたのはセシリアでなんだか変なコント？をやっている

「一馬、知ってんのか？」

「さっきの休み時間に話しかけられた」

「途中で話しをはぐらかされましたですけどね」

セシリアが一馬と一夏の会話に割ってはいる

「んで、俺達に何か用か？イギリス代表候補生さんよ？」

「…なあ、一馬。聞きたいことがある」

「なんだ？」

一夏の質問に一馬は聞くことにした

「代表候補生って何？」

一夏の質問は2人の時間を一瞬停めるほどの威力はあった

「そう言えばお前、捨てたんだな参考書。代表候補生っていうのは」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。…あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「…そういわれればそうだ」

一馬は一夏が外人に母国語の日本語についてツッコまれるのはどうかと思っていて口には出さなかった。それが一夏の名誉の為である

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解してただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「なるほど。それはすごいな」

「…貴方がた、私をバカにしていますの？」

一馬はしてるが、一夏は知らない

「いや。全然」

「幸運だったっていったの、そっちじゃないか」

とりあえず一馬はごまかしたものの

「まあ、いいですけどね。大体織斑さん、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦出来ると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何か期待されても困るんだけど」

「ふん。まあでも、私は優秀ですから、あなたのような人間にも優しくあげますわよ」

「（相変わらず聞いてりゃ、癪に障る言い方だなおい）」

一馬はこの場をやり過ごすために黙って聞き続けた

「ISのことで分からないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げても良くてよ。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調するセシリアだが、此处で残念なお知らせがやって来る

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「…俺も」

一夏は分からないが一馬は負けそうだったが何とか勝ちを拾った。記憶を思い出す。一か八かの賭けで当たり、そこから攻めた結果勝ったのだ

「じゃ、じゃあ私だけたおしたってというのは…」

「〔女子限定〕ってオチだろ。…一夏、悪いがチャイム鳴りそうだから先に席に戻る。あの出席簿アタックは食らいたくないしな」

「お、おう」

「ちょっと！そっいつて逃げ…」

セシリアが言い切る前にチャイムが鳴った

「くっ…いいですか！またあとで来ますから、逃げないでください  
」！

一馬は断ると言いたかったが、セシリアはスタスタと席についたため言えなかったのだった



## 第2話 代表候補生（後書き）

如何だったでしょうか第2話

実はこれ3回目の投降なんですよね

1 回目は実験

2 回目は手違いで消去

3 回目はバックアップなしの記憶を頼りに制作し漸く完成しました

大変だったなというより自分のミスなんですよね（汗）

次回話はセシリアに決闘を申し込まれる話です

因みに一馬がISを動かした理由はまだ先になりますのでご了承下さい

以上リオでした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3679z/>

---

IS インフィニット・ストラトス ~大切なものを奪われた少年~

2011年12月17日11時48分発行